

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：23902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19967

研究課題名（和文）収容所の音楽 第一次世界大戦中の日本におけるドイツ軍捕虜の音楽活動

研究課題名（英文）Music in the Camps: Musical Activities of German Prisoners of War in Japan during World War I

研究代表者

七條 めぐみ（Shichijo, Megumi）

愛知県立芸術大学・音楽学部・講師

研究者番号：90963637

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次世界大戦中に中国・青島（チンタオ）から日本へ収容されたドイツ軍捕虜（俘虜）による音楽活動に着目し、それがどのような歴史的意味を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。2年間の研究成果として、以下の点が明らかになった。（1）捕虜の音楽・文化活動に対する日本陸軍側の姿勢は、約5年の収容期間の中で規制対象から収容所の安定的な運営に欠かせないものへと変化したこと。（2）捕虜による音楽活動は、青島時代の軍楽隊の音楽実践を直接的に受け継ぐよりも、近代ドイツのコンサート文化を反映するものであること。（3）名古屋収容所において、収容末期に音楽を含む演劇作品が上演されていたこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、音楽をはじめとする文化活動を切り口に、ドイツ軍捕虜収容所が近代日本においてどのような意味を持っていたのかを問うものである。本研究により、捕虜の音楽活動が一部の捕虜の音楽的素養だけに依拠するものではなく、日本陸軍の管理体制、民間企業からの支援、収容所の立地状況などの外部要因によって成り立つものであるという見方が強化された。すなわち、音楽はそれ単体で成り立つものではないという、音楽社会学的な視点を取り入れることにより、収容所が隔絶された空間ではなく周囲の社会環境と連関しながら存在するものであることを浮かび上がらせたと言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the historical significance of the musical activities of German POWs interned in Japan from Qingdao (Tsingtau, German leased land in China) during World War I. After two years of research, the following points became clear. (1) During the approximately five years of internment, the attitude of the Japanese military toward the music and cultural activities of POWs changed from being a regulated subject to being an integral part of the camp management. (2) The POWs' musical activities were not directly inherited from the musical practices of the military bands of the Qingdao period, but reflected the concert culture of 19th century Germany. (3) Toward the end of the internment period, theatrical performances incorporating music were held at Nagoya Camp.

研究分野：音楽学

キーワード：第一次世界大戦 日本の捕虜収容所 収容所の音楽活動 ドイツ軍楽隊 日独交流史

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦中、日本に収容されたドイツ軍捕虜とは、中国におけるドイツの租借地・青島をめぐる日独戦（1914年8月）により発生した約4,700名のドイツ軍人・軍属のことである。彼らはまず、日本各地の12都市の仮収容所に移送されたが、最終的に6か所の収容所に移された。すなわち、習志野（千葉）、名古屋（愛知）、青野原（兵庫）、似島（広島）、久留米（福岡）、板東（徳島）である。ドイツ兵たちの収容生活は1914年秋～1919年冬までの約5年におよび、この間、日本は国際条約に則り、捕虜を人道的に扱わねばならなかった。そのため、捕虜たちはスポーツ、演劇、音楽などの文化活動を行うことができた。

中でも音楽は、板東収容所におけるベートーヴェンの交響曲第9番の日本初演を筆頭に、ドイツ軍捕虜たちの文化活動の象徴として知られる。このような音楽実践に関しては、日本における捕虜研究が収容所単位で発展したために、個々の収容所での文化活動の一環として明らかにされてきた。たとえば、板東収容所を扱った富田弘『板東俘虜収容所』（1991）や、久留米収容所の音楽活動について明らかにした松尾展成『日本＝ザクセン文化交流史研究』（2005）などである。これらの研究では、収容所でどのような音楽活動が行われたのか、演奏会プログラム等の史料が発掘されるとともに、楽団の中心的人物であった捕虜に注目が集まり、彼らの伝記研究が詳細に行われた。こうしたモノグラフの重要性は強調するまでもないが、そこには捕虜の音楽活動を周辺に広がるさまざまな領域と関連付けて考察する視点が欠けていると言えよう。具体的には、日本の収容所における音楽活動が、（1）同時期の青島や本国ドイツのコンサート文化とどのように関連していたのか、（2）日本の地域社会、企業や外国人コミュニティといった、収容所外の世界とどのような関わりを持っていたのか、（3）近代東アジアの近代化の中でどのような意味を持つのか、という問いである。地域史としての収容所研究がひととおり熟した現在だからこそ、より幅広い視点から収容所の音楽活動を捉えなおす必要があると言える。

2. 研究の目的

本研究課題「収容所の音楽 第一次世界大戦中の日本におけるドイツ軍捕虜の音楽活動」では、第一次世界大戦下のドイツ軍捕虜による音楽活動を、音楽史、社会史、文化史の側面から考察することで、近代東アジアにおける歴史的意義を明らかにすることを目的とする。さらには、複数の視点を重ね合わせることで、これまで特定の捕虜の能力に依拠するものとして評価されてきた音楽活動に対し、収容所の内外の社会が接続しながら音楽活動を生じさせたという「文化実践の場」としての新たな収容所像を描き出すことを目指す。

3. 研究の方法

本研究では2年の実施期間において、以下の点に注目しながら研究を行った。

（1）音楽活動をめぐる外部社会との連携...捕虜の音楽活動は、収容所外部からの楽譜や楽器の寄贈により成立したという仮説を実証するため、収容所の楽団がどのように楽譜や楽器を入手していたのか、会計記録等を調査した。そのような資料の一例として、久留米収容所にあった捕虜たちの楽団が、現在も大阪に本社を置く三木楽器株式会社から洋楽器や付属物を購入していた記録が挙げられる。この記録を受け、三木楽器側に収容所との取引を裏付ける資料が残されているかどうかの調査を行った。

（2）青島の音楽文化との連動...第一次世界大戦の開戦前に青島に駐留していた「ドイツ軍第三

海兵大隊」に着目し、軍楽隊の変遷を複数の名簿資料から明らかにした。そうすることで、日本の収容所における捕虜の楽団が、第三海兵大隊軍楽隊とどの程度人的連続性があるのかを考察した。

(3) 名古屋収容所における音楽・文化活動...名古屋収容所に関する再調査の必要性は、本研究に着手し、各地の収容所研究者と交流を重ねる中で新たに浮かび上がった課題である。鳴門市ドイツ館およびシュトゥットガルト現代史図書館を訪問し、名古屋収容所の音楽・文化活動に関する資料を収集、分析した。

4. 研究成果

(1) ~ (3) の各観点について、以下のことが明らかになった。

(1) 音楽活動をめぐる外部社会との連携...残念ながら、現時点で仮説の十分な立証には至っていない。理由としては、収容所側の会計記録や寄贈受入記録から、日本の複数の洋楽器メーカーや洋楽器販売会社からの物的支援があったことが推定されるが、企業側には納品や寄贈を裏付ける資料が残されていないためである。この非対称性について、収容所では物品の購入や受入に関して細かく記録を取り、陸軍俘虜情報局に報告する義務があった一方で、民間企業にとっての収容所は臨時の取引先であったことから、販売等の記録に残りづらいのではないかと推測される。

この推論の妥当性を検証する一助として、陸軍俘虜情報局や個々の収容所が発行する報告書類を精査し、音楽を含む文化活動が日本側からどのように見なされていたのかを考察した。その結果、約5年の収容期間のうち、当初は音楽などの文化活動は規制の対象とされていたが、1918(大正7)年頃から捕虜の健康維持のため容認されるようになったことが明らかになった。ただし、捕虜が収容所外で音楽活動を行うことに対しては最後まで消極的な判断が下されており、陸軍は捕虜と地元住民が交わることに警戒感を抱いていたことが確認された。今後は俘虜情報局が音楽活動に対する姿勢を変化させた要因として、外国人の視察・介入による収容環境の改善に着目し、捕虜による音楽活動の歴史的意義を外部社会との関わりの中で位置づけることが目標である。

(2) 青島の音楽文化との連動...軍楽隊名簿の分析の結果、青島に駐留する第三海兵大隊軍楽隊は、ドイツの植民地政策と連動するようにして、1905年を境に楽団員の充足や楽器編成の多様化を図っていたことが明らかになった。また、日独戦の開戦を機に楽団員の大半は渡米し、捕虜として日本に収容されたのはごくわずかであることから、軍楽隊と捕虜楽団との人的連続性は希薄であることが浮き彫りになった。このことから、日本国内のドイツ軍捕虜による音楽活動は、青島の音楽文化が直接的なモデルであるというよりは、第一次世界大戦以前の、近代ドイツのコンサート文化を反映するものではないかという結論に至った。以上の内容を、2022年度に論文として発表した(「名簿資料から読み解く第3海兵大隊軍楽隊の変遷」2023)。

(3) 名古屋収容所における音楽・文化活動...従来明らかにされている1919(大正8)年前後の収容所外での演奏活動に加えて、同時期に収容所内でも音楽・演劇活動が行われていたことが明らかになった。上演された演劇作品の中には、幕間や作品中に音楽演奏を含むものもあり、音楽と演劇が一体となった公演が行われ、それが名古屋の一般市民に公開された可能性があることが判明した。ただし、名古屋において捕虜たちの文化活動が盛んになるのは、1919(大正8)年に入ってからのものであり、大規模収容所の開設後すぐに文化活動が行われていた久留米、板東、習志野収容所と比べると、実施の本格化には時間がかかったと言える。このことには、名古屋収容所が6つの収容所の中でも特に人口の多い都市部に置かれており、陸軍の師団とも距離が近

かったという立地条件が影響していると考えられる。本研究では以上の内容を、2023 年度に口頭発表した(「名古屋のドイツ軍俘虜収容所における演劇・音楽活動(1914-1919)」2023)。また、名古屋収容所における文化活動を、収容所の置かれた環境や地元住民との関わりの中に位置づけるものとして、シンポジウムでの発表(「松坂屋とドイツ兵俘虜との音楽交流」2023)を行うとともに、書籍『愛知の大正・戦前昭和を歩く』(風媒社、2023)では一部項目を分担執筆した(「ドイツ人捕虜が名古屋で大活躍 いまにつながる文化・技術が生まれた」朝井佐智子氏との共著)。

これらの研究成果から、ドイツ軍捕虜の音楽活動は陸軍俘虜情報局の管理体制、民間企業からの支援や収容所の立地条件に左右されるものであり、収容所外部の社会との関係性の中で成り立っていたということが明らかになった。これまで、音楽活動に関しては一部の音楽的素養を持つ捕虜による功績が大きいとされてきたが、軍楽隊員や職業音楽家がほとんど在籍しない状況下で、日本国内のすべての収容所において音楽活動が行われていた背景には、それを支援する官民両方からの動きがあったと考えられる。今後は、日本陸軍が音楽活動を規制から容認に転換した要因を探るとともに、戦時収容所における音楽活動が日本に特異的なものであったのか、収容所の国際比較を進めながら明らかにする予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 七條めぐみ	4. 巻 18
2. 論文標題 名簿資料から読み解く第3海兵大隊軍楽隊の変遷	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ミクスト・ミューズ（愛知県立芸術大学音楽学コース紀要）	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 七條めぐみ	4. 巻 69(2)
2. 論文標題 書評：岩井正浩著『第一次大戦と青野原ドイツ軍俘虜 収容所の日々と音楽活動』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 153-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 七條めぐみ
2. 発表標題 松坂屋とドイツ兵俘虜との音楽交流
3. 学会等名 シンポジウム「モダン文化の 場所 松坂屋、地方映画館、名古屋の洋楽」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 七條めぐみ
2. 発表標題 名古屋のドイツ軍俘虜収容所における演劇・音楽活動（1914-1919）
3. 学会等名 第65回愛知音楽研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------